映画のテキストで探る現代社会学部の学生の問題意識

森永弘司（同志社大学）

日本英語教育学会・日本教育言語学会第51回年次集会
2021年2月27日

１．はじめに
２．同志社女子大学の現代社会学部に関して
３．使用した映画のテキストに関して
４．レポート課題のテーマ
５．選ばれたエッセイとコラムに関して
６．選ばれたエッセイとコラムに関する考察
７．まとめ

１．はじめに

本発表では多様化していく現代社会が抱える諸問題に対して、現代社会学部の学生がどのような問題に関心を持っているかを、現代の諸問題を扱った映画のテキストを素材にして探ろうした結果に関して報告したい。

参加者は同志社女子大学の現代社会学部の２年生３３名である。授業科目はAcademic Reading and Discussionという名前の２年次生の英語必修科目である。

同志社女子大学の現代社会学部に関して

学びの特徴

現代社会に不可欠なスキルを磨きつつ、柔軟な社会への対応力をベースに、5つの領域から現代社会が抱えるさまざまな課題にアプローチ。幅広い視野と専門性を養い、広く社会で活躍する女性を育みます。（同志社女子大学のホームページからの抜粋）

５つの領域

多文化共生コース

多様な文化・国籍・民族・言語などの違いを理解し認め合い、ともに生きていくための知識・コミュニケーション力を高めていきます。

京都学・観光学コース

「京都」の歴史や文化、観光理論、ホスピタリティなどの知識を深め、地域開発、都市政策や観光事業に携わる力を培います。

ライフデザインコース

心理学や福祉学、教育学、ジェンダーなどの知識に加え、リーダーシップ、ケアする心などを身につけ、真に豊かな人生を創造する力を養います。

ビジネスマネジメントコース

経済や経営、企業を取り巻く社会環境、マーケットなどの基礎理論を身につけ、ビジネス社会で役立つ実践力を磨きます。

公共政策と法コース

社会を支える法や発展の礎となる公共政策などを重点的に学び、公務員や企業人として、その知識の活用をめざします。

（同志社女子大学のホームページからの抜粋）

使用した映画のテキストに関して

使用したテキストは、2020年金星堂刊行の”*Our Society, Our Diversity, Our Movies*”(『映画に観る多文化社会のかたち』)、編著者Joseph Tabolt / 森永弘司である。

テキストに収録した映画のタイトルと副題およびエッセイとコラムの表題

Unit 1 *Three Billboards Outside Ebbing, Missouri* , White trash – United by Desperation,「ミズーリ州とプアホワイト」

Unit 2 *Moonlight* , LGBT – Assigning a Label,「『ムーンライト』の主人公が抱える3つの差別」

Unit 3 *Hidden Figures* , Gender and Racial Segregation – Prejudice and Egocentrism,「*Hidden Figures* というタイトルが示唆すること」

Unit 4 *12 Years A Slave,* Slavery systems – Human vs. Property,「アメリカにおける黒人奴隷の歴史」

Unit 5 *Brooklyn,* Immigrants – Choosing a Home,「アイルランドとアイルランド系アメリカ人」

Unit 6 *Gran Torino,* Immigrants – Be an Intercultural Interpreter,「デトロイトという街と「グラン・トリノ」という車の持つ意味」

Unit 7 *The Visitor* , Illegal immigrants – An Illegal Life,「アメリカにおける移民政策の歴史」

Unit 8 *English Vinglish,* Foreign languages – Foreign Language and Self-Confidence,「インドと英語の関係」

Unit 9 *Lost in Translation,* Cross – Cultural Communication – Frame of Mind,「ローコンテクスト文化とハイコンテクスト文化」

Unit 10 *I, Daniel Blake* , State welfare – An Individual or A Number,「イギリスの過酷な社会保障制度」

Unit 11 *The Theory of Everything,* Physical disability – Life is Chance: Pushing Past Boundaries,「ALS（筋萎縮性側索硬化症）と2人のスター」

Unit 12 *Dallas Buyers Club* , Diseases– Does it Divide or Unite,「HIV/AIDSと偏見」

Unit 13 *American Sniper* , PTSD – Finding a Cure,「戦争とPTSD」

Unit 14 *Hotel Rwanda* , Refugees – Is Your World Peaceful?「ルワンダの歴史と虐殺」

Unit 15 *Schindler's List* – The Holocaust/ History –Sense of Reason,「日本の２人のシンドラー」

レポート課題のテーマ

１．論題

①　テキストで扱った１５編の映画のエッセイ中で、興味・関心を持ったエッセイ（複数選択可）を取り上げて、そのエッセイに興味・関心を持った理由をエッセイに具体的に言及して詳述して下さい。

②　テキストに収録されている１５編のコラムの中で、面白かった又は有益だったコラム（複数選択可）を取り上げて、そのコラムを面白い、或いは有益だと思った理由を詳述して下さい。

執筆要項

Wordを使用して書いて下さい。

和文でも英文でもどちらでも可です。

活字は10.5pointで、シングル・スペースで書いて下さい。

分量は最低でA4の用紙にきっちり各１枚、論題①②合計で２枚（上限はありません）書いて下さい。

5. 選ばれたエッセイとコラムに関して

Unit	エッセイのタイトル	人数	コラムのタイトル	人数
1	*Three Billboards Outside Ebbing, Missouri* , White trash	0	「ミズーリ州とプアホワイト」	0
2	*Moonlight* , LGBT	1	「『ムーンライト』の主人公が抱える3つの差別」	14
3	*Hidden Figures* , Gender and Racial Segregation	7	「*Hidden Figures* というタイトルが示唆すること」	3
4	*12 Years A Slave,* Slavery systems	3	「アメリカにおける黒人奴隷の歴史」	9
5	*Brooklyn,* Immigrants	6	「アイルランドとアイルランド系アメリカ人」	2

6	*Gran Torino,* Immigrants	1	「デトロイトという街と「グラン・トリノ」という車の持つ意味」	2
7	*The Visitor* , Illegal immigrants	5	「アメリカにおける移民政策の歴史」	0
8	*English Vinglish,* Foreign languages	11	「インドと英語の関係」	13
9	*Lost in Translation,* Cross – Cultural Communication	2	「ローコンテクスト文化とハイコンテクスト文化」	3
10	*I, Daniel Blake* , State welfare	0	「イギリスの過酷な社会保障制度」	3

１１	*The Theory of Everything*, Physical disability	7	「ALS（筋萎縮性側索硬化症）と2人のスター」	6
１２	*Dallas Buyers Club* , Diseases	2	「HIV/AIDSと偏見」	6
１３	*American Sniper* , PTSD	3	「戦争とPTSD」	14
１４	*Hotel Rwanda* , Refugees	1	「ルワンダの歴史と虐殺」	2
１５	*Schindler's List* – The Holocaust/ History	2	「日本の２人のシンドラー」	3

Unit1の *Three Billboards Outside Ebbing, Missouri* は、キリスト教の信仰があつい「バイブル・ベルト」(「聖書地帯」)に居住する差別的で暴力的で、女性を侮蔑する貧しい白人(white trash, poor white)を取り上げた作品である。white trashは元大統領のトランプが大統領に就任する際の原動力となった支持層である。しかしながら、学生にとってはアメリカの白人の貧困層の問題は身近な問題とは考えられなかったために、エッセイ、コラムともにこのUnitを取り上げた学生は皆無であった。

Unit2の*Moonlight*はLGBTを扱った作品で、LGBTを扱った作品で初めてアカデミー作品賞を受賞して作品である。エッセイは1人、コラムは14人の学生がこの作品を取り上げていた。コラムで14人の学生がこの作品を取り上げたのは、この作品の主人公が三重の差別に苦しむ存在であったことを述べたことが大きく影響していると考えられる。以前に比べると露骨な差別は少なくなったとはいえ、黒人に対する差別意識は依然として存在している。また黒人社会の間にも、上流、中流、下流といった社会階層があり、主人公は下流社会に属する。彼はゲイであるために下流の黒人社会の中でも差別を受ける。この差別の三層構造が学生の問題意識を引いたと思われる。

Unit3の*Hidden Figures* は1961年のNASAのラングレー研究所で活躍した３人の黒人女性を主人公とする映画である。この映画のタイトル *Hidden Figures* が示しているのは、この映画が公開されるまで彼女たちの存在がごく少数の人を除けば「知らぜらる人物」であったことである。エッセイは7人、コラムは３人の学生が共感を示していた。その理由は、黒人でありかつ女性であるために多くの差別に直面しながらも、知性と努力と強い意志で、差別を乗り越えたところにあると考えられる。

Unit4の12 Years A Slaveは、1841年に自由黒人の身でありながらワシントンD.Cで誘拐され奴隷として売られながら１２年後の1853年に自由の身になったソロモン・ノーサップという人物の実話をもとに制作された映画である。この作品のエッセイには3名、コラムは9名が共感を寄せていた。最初の黒人奴隷は1619年にバージニア州のジェームズタウンにオランダ商人によって連れてこられた。黒人奴隷制度に関しては関心を持つ学生が比較的多くいたので、「アメリカにおける黒人奴隷の歴史」と題したコラムに問題意識を引かれたと推察できる。

Unit5の*Brooklyn*は、国内の慢性的不況のため、1950年代にアイルランドからニューヨークのブルックリンへ移民した若い女性の葛藤を描いた作品である。移民してきた当初彼女はブルックリンの生活に馴染めずホームシックにかかってしまう。しかしながら次第にブルックリンでの生活に慣れ、恋人ができ大学の授業にも通うようになる。そうした時に、アイルランドに住む姉が急死し、残された母の面倒を見るためにアイルランドに帰国する。彼女はブルックリンに戻るか、アイルランドで再び人生を送るかの選択を迫られる。彼女は最終的にブルックリンでの生活を選択する。このエッセイを選んだ学生は6人いたが、全員が地方から京都に出てきた学生で、自分も将来生まれ育った故郷での生活を優先するか、それとも故郷を離れた暮らしを選ぶのか、選択しなければならないという問題意識にもとづいてこの作品を選択していた。

Unit6の*Gran Torino*では、自動車の街デトロイトで暮らす気難しい愛国主義者の老人ウォルと、家の隣に引っ越してきたモン族一家との交流、そして一家の少年タオに対するメンターとしてのウォルトの行動を中心に物語が展開する。モン族というのは中国の雲貴高原、ベトナム、ラオス、タイの山岳住む民族である。現在日本でも移民が増えつつあるが、身近に移民がいる生活を送っている学生がいなかったためにこの作品のエッセイを取り上げた学生は1名、エッセイは2名に留まった。

Unit7の*The Visitor*の主人公は、父親の政治活動による迫害を避けるためシリアからニューヨークへ逃れ、正式な書類申請をおこなっているタレクという人物である。書類申請の結果を待つ一方で、タレクは学校へ通い、恋人ができ、アメリカでの生活を築いている。ところが3年が経ち、彼の在留申請は却下され、不法移民の身となる。やがて彼は捕らえられて拘置所に収容され、国外退去の身となる。不法移民の問題は日本でも取り上げられ、今後移民の増加と共にグローズアップされる問題だと思われるので、5名の学生がエッセイに取り上げていた。

Unit8の*English Vinglish*は、英語が苦手なインド人主婦シャシの物語である。彼女はインドの裕福な家庭の自尊心を持った賢明で従順な母親であるが、英語が出来ないために度々恥ずかしい思いをする。ある日、彼女は姪の結婚式に出席するために一人でアメリカに旅行せざるを得なくなる。現在のインドの公用語はヒンディー語であるが、長年にわたって英語による教育がおこなわれてきたために、英語が準公用語となっている。とはいえ2005年に実施された英会話力の調査では、「英語で流暢に会話ができる」と答えた人は僅か４%、「少しできる」と答えた人も１４%にすぎない。この作品のエッセイには11名、コラムには８名の学生が名を連ねていたが、英会話の習得に悪戦苦闘する主人公の姿に英語で苦労している我が身を重ね合わせているのであろう。

Unit9の*Lost in Translation*は、日本のウイスキーブランドのイメージキャラクターに起用されコマーシャル撮影のために来日したアメリカ人俳優ボブを主人公とする物語である。コマーシャル撮影現場では日本人通訳が付いているにも関わらず、自分の本意が伝わらないことに苛立ちを募らせる。欧米のコミュニケーションスタイルは一般的に言語に依存しておこなわれる「ローコンテクスト文化」であるのに対して、日本のコミュニケーションスタイルは、「空気を読む」ことや「忖度」が重視される「ハイコンテクスト文化」である。この作品のエッセイに関して取り上げた2名、コラムに関して取り上げた3名の学生は日米のコミュニケーションスタイルに興味・関心を示していた。

Unit10の*I, Daniel Blake* は、過酷なイギリスの社会保証制度に翻弄される人々の姿を描いた作品である。主人公のダニエル・ブレイクは間もなく60歳を迎える大工であるが、心臓病を患い、医師から働くことを禁じられ、生活保護を申請せざるをえなくなる。かつてのイギリスは、「ゆりかごから墓場まで」というスローガンのもとに社会保証制度の充実をはたした国であったが、現在では「片手に指が一本でもあれば就労可能」と皮肉られほど障害認定が非常に厳しい国になってしまった。ブレイクは必死の努力で生活保護を得ようとするが、その最中に心筋梗塞で亡くなってしまう。この作品のエッセイを取り上げた学生は一人もいなかったが、コラムの「イギリスの過酷な社会保障制度」に関しては3人の学生が取り上げていた。

Unit11の*The Theory of Everything* は,ALS（筋萎縮性側索硬化症）という障害を持つイギリスの天才理論物理学者のスティーヴン・ホーキング博士と彼を支えた妻のジェーンの実話をもとにした作品である。先天的な障害もあれば、後天的なものもある。誰も障害を負う可能性がまったく無いと断言できないであろう。またこの作品で描かれているように、障害を持つ人の世話をするには献身的な努力が必要とされる。ホーキング博士が理論物理で世界的な業績を上げることができたのは、ジェーンが自分の望みや夢を断念したおかげである。高齢化社会が進むにつれて、障害を持つ人、障害者の世話をする人の数もますます増えていくであろう。このことがこの作品のエッセイを7人、コラムを6人あげていた理由であろう。

Unit12の*Dallas Buyers Club* 、まったく予期せずHIVに感染していると診断され、余命一ヶ月と宣告された実在の人物ロン・ウッドルーフが自力でHIVの治療薬を開発しようとした物語である。HIVは死に至る病気ではないが、2017年時点では世界に約3,700万人の感染者があり、毎年約100万人が亡くなり、約200万人が毎年感染している。日本でHIVが広く知られるようになったのは「薬害エイズ事件」を通してである。HIVに感染していたと推定される血液製剤を使用した血友病患者がHIVに感染したのである。その結果日本の血友病患者の約4割にあたる1,800人がHIVに罹患し、600人以上が亡くなったのである。この作品のエッセイでは2名、コラムでは6名の学生が取り上げていたが、これには現在のコロナ禍の影響もあると推察される。

Unit13の*American Sniper* は、イラク戦争時に「伝説の狙撃手」と呼ばれたアメリカの実在の狙撃手クリス・カイルの自伝を原作とする映画である。カイルはイラク戦争開戦以降、４回出征し、米軍史上最多の１６０人を射殺した。クリスは情報提供者の親子が拷問を受けて殺害された時に情報提供者の命を救いそこね、これが彼にとって消えることがないトラウマとなり、PTSD（心的外傷後ストレス障害）を発症する。PTSD発症の引き金になるのは、親による虐待、レイプ、大地震などの自然災害、途方もない暴力や痛みなどである。この作品のエッセイでは３人、コラムでは９人が取り上げていたが、現在PTSDを患っている学生もいた。

Unit14の*Hotel Rwanda* は、民族対立による人類史上例を見ないジェノサイド（集団虐殺）とそれによって発生した難民の悲劇を描いた作品である。1994年の４月からの約100日間で、当時のルワンダの総人口約730万人のうちおよそ80～100万人が虐殺の犠牲になったと推測されている。ルワンダという国が我々日本人にとって余り馴染みのない国であり、また難民も我々日本人には身近な存在ではないために、この作品のエッセイを取り上げた学生の数は1名、コラムは2名に留まった。

Unit15の*Schindler's List*は、実在のドイツ人実業家のオスカー・シンドラーが自分の工場で働く1,200人のユダヤ人労働者をナチスドイツの虐殺から救った物語である。1939年から45年にかけておこなわれたナチスドイツによるユダヤ人大虐殺では、600万人を超えるユダヤ人が犠牲になった。ユダヤ人救出に尽力した2人の日本人がいる。1人はリトアニアのカウナス領事館の領事代理であった杉原千畝で、領事館に救いを求めてやってきたユダヤ避難民に6000人以上の「命のビザ」を発給した。もう1人は樋口季一郎で、彼はユダヤ人に対して満州への国境通化許可を下すことで、一説では2万人のユダヤ人の命を救ったといわれている。この作品のエッセイを取り上げた学生は2名、コラムは3名であった。

まとめ

エッセイに関して

1. *Hidden Figures*（7名）、*Brooklyn*（6名）、*English Vinglish*（11名）、*The Theory of Everything*（7名）のような女性が主人公あるいは準主役を演じている作品に共感する学生が多く見られた。

2. テーマとしては黒人差別[*Moonlight*（1名）、12 Years A Slave（3名）や黒人差別と性差別[*Hidden Figures*（7名）]に関心を持つ学生が比較的多かった。

3. 次いで移民や不法移民の問題[*Brooklyn*（6名）、*The Visitor*（5名）] 関する問題意識も高かった。

コラムに関して

1. 黒人差別、女性差別、LGBT[「『ムーンライト』の主人公が抱える3つの差別」(14名)、「*Hidden Figures* というタイトルが示唆すること」3名)、「アメリカにおける黒人奴隷の歴史」(9名)]に関しての問題意識が強かった。

2. 次いで障害、HIV、PTSD、戦争[「ALS (筋萎縮性側索硬化症)と2人のスター」(6名)、「 HIV/AIDSと偏見」(6名)、「戦争とPTSD」(9名)]に関する関心も高かった。

3. 外国語(英語)や異文化コミュニケーション[「インドと英語の関係」(8名)「ローコンテクスト文化とハイコンテクスト文化」(3名)]についても比較的関心が高かった。

ご清聴ありがとうございました。